

【研究報告】

## 広島文教女子大学における福祉教育の改善に関する研究（第2報）

小川 真史 西山 美香 橋本 圭子 溝渕 淳  
太原 牧絵 竹川 加奈恵 内田 沙織

### 0. はじめに

昨年から継続し、本年度も標記研究に取り組んだ。研究の概要等は昨年度の第1報を参照されたい（※1）。本報告では、本年度の調査結果から読み取れること、さらには今後の展望について、簡略にまとめておきたい。データも蓄積されてきていることから、本来なら昨年以上に充実した内容を伝えなければならないが、メンバーの多忙等さまざまな理由により、極めて簡略な報告となってしまったことをお詫びする。来年度はより充実した内容の報告となるよう努力したい。

### 1. 本年度の活動

本年度は、昨年同様、平成25年度入学生（今年度2年次生）に対し、5回目の調査を2014年4月に、6回目の調査を同年6月に、7回目の調査を同年9月に、8回目の調査を同年12月に実施した。今年度の調査研究についても、実施する上での倫理的配慮の徹底のため、広島文教女子大学研究倫理審査会の研究倫理審査による承認を経ている。それぞれの質問項目は次の通りである。

第5回：後期の成績を見て、あなたが大学入学から今までの授業を受けた中で、「理解した」、「理解できた」と実感したのは、「何が」「どのように」なったことでしょうか？

第6回：あなたが大学入学までの授業の中で、「理解した」、「理解できた」と実感したのは、「何が」、「どのように」なったことでしょうか？

第7回：前期授業の成績を見て、あなたが大学入学から今までの授業を受けた中で、「理解した」「理解できた」と実感したのは、「何が」「どのように」なったことでしょうか？

第8回：あなたが大学入学から今までの授業を受けた中で、「理解した」、「理解できた」と実感したのは、「何が」、「どのように」なったことでしょうか？

入学年度毎の比較検討の必要性から、平成26年度入学生（今年度1年次生）にも、昨年の1年次生と同様の質問項目で調査を実施した（※2）。もちろん、

調査対象に対し入学直後に研究目的や研究方法、本研究に対する問い合わせ先等を明記した同意書を作成し、研究の概要について説明を行っている。

なお、後にも触れるが、昨年度入学生と今年度入学生ではカリキュラムが若干変更になっていることを付記しておく。

### 2. 調査の結果（概観）

各回のアンケート結果について、昨年同様TRUSTIA（株式会社ジャストシステム）を用いて、テキストマイニングを実施した。なお、文字数は2年次生が35文字前後、1年次生が30字程度で、各回ともあまり差がなかった。これはアンケート用紙の形式によるところが多い。以下では、各学年の結果について簡略に述べる。

#### (1) 2年次生について

5回目のアンケート結果を見ると、1年次後期の成績が出たこともあり、前期の成績との比較を通し、自らへの気づきを深める記述が多く見られた。1年間の成果にふれることで、これまでの学びを改めてふりかえり、新たな学びの意欲を持つとする姿勢を見ることができた。また、「理解する」「分かる」ということの実感が肯定的に表現されており、それらが「授業」や「専門」というキーワードに関連しながら挙げられていることが特徴的であった。

6回目では、カリキュラムの中に、社会福祉士国家試験受験資格取得に必要な専門科目が増えたことへの戸惑いが見られる。専門的な知識を理解することの難しさや、それを国家試験に備えて記憶していかなくてはならないことへの不安が表現されている。特定の専門科目名（「社会保障」「相談援助」など）も目立つようになってきた。また、2年次より小人数クラスによる「相談援助演習」が開始されたことも結果に反映している。人との「関わり」の「難しさ」についての言及が多く見られたり、「グループワーク」というキーワードが多く登場したりする。

7回目では、「体験」を通して学ぶことや、学びの「積み重ね」の大切さへの気づきに関する記述が多く見られる。また、6回目にやや戸惑い気味だった知識の理解に関する表現が、理解できたことへの喜びの表現に若干変化している。この理解の喜びに関連して、

演習などの授業で実際に行動した際、これまでの講義での知識が活かされたことや、ある授業で学び、蓄積した知識が別の授業で活かされたことがそのきっかけとなっている。さらには、授業の内容がより専門的かつ実践的なものになってきたことを受け、自らの将来について考えたり、社会福祉およびその専門職に対する自らのイメージを変化させていったりする傾向も見取れた。

8回目では、6～7回目の結果を引き継ぐ形で、「グループワーク」や「事例検討」など、演習での学びに関する記述が見られる。また、これらの内容に付随して「理解」が「深まる」ことを実感する記述が見られる反面、「難しさ」を感じるようになったという記述も散見されるようになった。カリキュラム上では、全学生が現場実習を意識する時期になり、事前指導が開始されたこともあり、実習に対する不安や、実習に備えた学びに関するキーワード(「実習」「実習先」「施設」「分野」)も多く見られた。さらに、ある知識や事象について複数の授業で説明を受けることを通して理解が深まったり、自らの理解の度合いを確認できたりしたという記述が、7回目以上に多く見られるようになった。

## (2) 1年次生について

1回目については、昨年度の1年次生と同様の傾向が見られた。「わかる」ことと数学等の「問題」を解くことがかなりの頻度で関係づけられていた。また、その主語は「自分」であることが多く、自分で問題を解けることが、「わかる」ことへと直接的に解釈される傾向が強かった。「理解する」という表現が用いられる場合には、「先生の話」や「授業の内容」に関することがほとんどであり、「自分自身」への気づき、すなわち自己覚知に関する内容は少なかった。

2回目では、「問題」を「解く」といった表現が消え、「自分」で「理解」したり「説明」できたりすることを挙げる場合が増えてきている。また、高校との学びの違いや教員との質疑応答といった双方向のやりとりに関する記述が見られるようになった。さらには自分なりに話せたり答えを出したりすることへのこだわりが多く見られるようになった。

3回目の調査では、前期の成績が出て、自らの学びに客観的な評価が与えられたことや、前期試験の問題に適切に答えられたことへの記述が多く見られた。昨年度と同様、自分自身ではない、他者からの評価を通して再び自らを見つめ直すという学びのプロセスの進行を読み取ることができた。その一方で、社会や時事問題等に関心をもつ度合いが昨年に比べ減少している。むしろ、授業で学んだ個別の事象(認知症・麻痺…など)への理解の深まりについての表現が多かった。

4回目の調査では、3回目の傾向がより強いものとなっており、授業で習った個別の事象に対し、深く、かつ具体的に理解することについての表現が多かった。この面については、「福祉用語」などの表現も多く見られ、昨年に比べて専門的な分野とそこの知識への理解の深まりを志向していることがわかる。その一方で、学んだ内容を自ら人に説明できたり、日常の中で活用したりといった形で、いかにして応用するのかといった面についても記述が見られるようになった。

## 3. 今回の結果を踏まえて

今回の調査結果を踏まえていくつかのポイントを示しておきたい。

### (1) 演習・実習授業について

2年次生において、演習・実習の授業がカリキュラム上に登場したことが、学生の理解度に影響を与えている。講義を通じた知識の獲得中心であった社会福祉の学びが、実際に人と関わり、話をする中で知識や技術が実践的に求められるようになったことへの戸惑いや、実際に活用できるようになったことへの喜びが数多く表現されている。さらにはこれらの学びを通して自己覚知への深まりや、適性も含めた専門職としての意識向上が図られていることが見て取れる。本研究では、演習・実習の授業をコアとしながら、本学の学びをいかにコーディネートしていくのかという問題意識がメンバー間で共有されている。今回の結果を見る限り、演習・実習の授業を通して、学生の学びの質が変化していることが確認できる。3年次では、継続して演習の授業が展開され、また、現場実習を体験することになる。これらのプロセスの中で学生の学びの質がどのような形に変化し、深まっていくのかを引き続き把握していく必要がある。

### (2) 異なる視点からの学びの重要性

上記(1)は「講義」と「実習・演習」という授業形態の違いから生じる学びの深まりに関する言及であった。一方、2年次生の記述によると、異なる「講義」から同じ内容の事象が説明されることによって、理解が深まっていることがわかる。ただし、ここには2つの意味合いがある。まずは、①全く同じ内容を、別の授業で反復して伝えられたことを通じた理解の深まりである。次に、②同じ内容について、別の授業でそれぞれの教員の独自の視点から説明されることによって生じる理解の深まりである。①と②は学びの質という面について違いが生じる。①では、ひとつの事象に対する解釈は一定しており、それが繰り返し伝えられることによって印象に残っていく、といった学び方になるだろう。一方②では、ひとつの事象に対して多面的な理解がもたらされることにより、それぞれの

説明の内容を吟味し、自らの考えや認識を問い直し、見いだしていく学びの契機となる。われわれが本来目指すべき学びは、②の意味合いでの学びであろう。

社会福祉士等、資格取得のための学びでは、求められる知識の量が決まっている。しかもそれは極めて膨大なものである。そのため、カリキュラムをコーディネートする際には、限られた機会の中でいかに効率よく学んでもらうかということを優先しがちである。しかしながら今回の結果を見る限り、同一の事象であっても、それぞれの教員の独自の観点から多様な機会の中で説明が展開されることによって、単なる知識の蓄積ではない、自ら考える学びを促進することができるのではないだろうか。これは、前回の報告においては「指定科目間の相互作用」として言及された部分である（※3）。多面的な説明による学びの深まりというコンセプトは、今後カリキュラムをコーディネートする上でも十分考慮されなければならない。

#### 4. おわりに 今後の展望

今年度はこれまで1年次の後期に展開されていた「人間科学基礎演習」の授業がカリキュラムから消えた。そのため、いくつかの講義の中でグループワーク等の方法を用いた授業が実施された。しかし、昨年度と比較して、他者との関わりやその中の自らへの気づきに関する言及は明らかに少ないものとなっている。

来年度は1年次生の前期に「人間福祉基礎演習」が開講され、早い段階での学びへの意識付けやグループワークを通じた授業等が展開される。これまでと同様、アンケートを実施し、その結果を分析するとともに、各学年の違いを見いだした上で、本学科における初年次教育やカリキュラムのコーディネートについて考察を深めていく。

さらには前述の通り、平成25年度入学生は、来年度にはほぼ全員が現場実習へと赴くことになる。現場での実習体験を通して、学生の「理解した」ことへの認識がどのように変化するのか。今後も本調査を継続し、その結果を報告していきたい。

#### 【註】

- ※1 小川真史・西山美香・橋本圭子・溝渕淳・太原牧絵・竹川加奈恵・内田沙織、2014、「広島文教女子大学における福祉教育の改善に関する研究(第1報)」、『人間福祉研究第12号』、広島文教女子大学人間福祉学会、pp.111-6.
- ※2 「前掲報告」、pp.113-4.
- ※3 「前掲報告」、p.112.